

第2回高知県社会教育委員会（平成31年4月1日～平成33年3月31日任期）会議概要

令和元年7月31日（水）14:00～17:00
有料老人ホームあつとホーム1階

1 開会（14:00～14:10）

高知県社会教育委員長挨拶

【事務局より日程調整】

2 議事（14:10～16:00）

テーマ：地域全体で子どもたちの成長を支える社会教育のあり方について

～「厳しい環境にある子どもたち」を社会教育の視点から支える方策～

（1）えいや家の取組報告

（2）意見交換

【NPO法人GIFT事務局長眞鍋氏よりえいや家での取組について説明】

（講師：NPO法人GIFT事務局長眞鍋氏）

コンセプトは、いろいろな人が持つ「夢」を支援し、実現できるような社会をつくること。

子ども食堂を始めたきっかけは、学校から「お腹が空いていたら夢も見れない」ということを聞き、子どもの貧困が問題ということを知ったこと。

始めた当初は子ども食堂の認知度も低く、なかなか場所を借りることができなかったが、高知市社会福祉協議会の仲介で社会福祉法人ふるさと自然村が運営している有料老人ホームあつとホームの1階部分を無料で借りることができるようになり、すべての人が可能性を感じ、チャレンジできる社会を目指して活動することになった。

最近は子どものみならず、社会全体の自己肯定感が低いと言われているが、自信を持たせるためには小さい成功体験を積み重ねていくことが必要。

地域で持続可能な学びの場をつくりたいと考えている。

2016年11月から、毎週水曜日、年間約50回開催している。水曜日以外にもクリスマスイベントなど、施設利用者と一緒にイベントをすることもある。延べ参加者数は1年目は約1,300人、2年目は約1,600人、3年目となる今年はそれを超える見通し。1回あたりの参加者は、50名ほど。

貧困という表現から金銭的なことを想像するが、居場所がないなど、こころの問題がある。

昔はやんちゃをしていると地域の大人から叱られたが、今は少し騒げば不審者扱いされるなど、声かけのハードルが高くなってしまい、問題にならないためにも声をかけないでおこうという社会になってしまっている。

誰が来てもみんな知り合いで、安心のできる小さな社会のような場所にしていきたいと考えている。

えいや家だけで子どもたちのお腹を満たすことができないとも思っているので、どんな環境においても成長していくことのできる考え方や行動を学ぶことが大事だと考えている。そうした場所が特別なものではなく、地域に当たり前にある環境が大切。

学校や職場よりも、インターネットの中に居場所を感じている若者が増えてきている。

子どもの非認知能力（多種多様な社会の中で生きていくために必要な数値化することのできない能力）を高めていくためには、好きなことを目一杯するというのが一番だが、家庭ではなかなかそれができないので、えいや家に来たら自分の責任の範囲内でやりたいことができるようにしてあげたいと思っている。

実際の体験が学びとなる場にしたいと思っている。

えいや家では、異年齢間での相談や赤ちゃんの世話をする子どもも珍しくない。

子どもたちに調理もさせており、中には指を切る子どもがいるが、自己責任の下で学んでいく。

自分のやりたいことを体験の中で見つけさせるようにしている。

子どもだけでなく自分の子育てに悩んでいるお母さんが相談や子育て方法の確認をし合ったりもしている。子どもと地域が元気であるためには、お母さんが元気なことが一番だと考えている。

えいや家では、子どもたちや保護者にはサービスではないので、子どもたちには、したいことがあれば自分です

るようにさせている。そして、みんなの持っている力を合わせて居場所をつくっていくんだということ意識付けたいと考えている。

スタッフの人員不足が課題であり、地域に活動を拡げていくことが重要。

主体的ミーティングやリクエストボックスを設置などして、何をしたいのかを子どもたちに考えさせている。

友達の輪への入り方を知らなかった子どもが友達と一緒に遊ぶようになるまで成長したケースもある。

学校などの人の多い騒がしい環境に馴染めない人の居場所となるべく、えいや家ポケットも運営している。

本当に厳しい環境にある子どもたちは、えいや家にも来ることができない子たちであり、そうした子に手を差し伸べて行く必要がある。

本当に求められているものは何かを探ることをしていきたい。

居場所があるからこそ生まれるつながりを大切にしていきたい。

(委員長)

ありがとうございました。それでは質疑に移る。

(委員)

活動を始めたきっかけを伺いたい。

(眞鍋氏)

すべての子どもに悔いのないよう生きてもらうため「学びの場」をつくろうと思った。

(委員)

眞鍋氏の話を受け、様々な世代が連携した場所をつくっていきたくと思った。

(委員長)

最初はどのようなきっかけで、誰に声をかけて、どんな風に拡がっていったのか詳しく聞きたい。

(眞鍋氏)

お寺（自身が住職のため）などで、学びの場をつくりたいという自分の夢を発表していく中で賛同者が集まり、民生委員の会合に顔を出すなどしてつながりをつくっていった。

(委員長)

活動を始めるにあたり、最初の一步が難しいと思われるが、どういったことが必要なのか。

(眞鍋氏)

やり方は無限にあり、できないこともないと考えている。

(委員)

活動をする中で、地域の人との関わりについて知りたい。

(眞鍋氏)

地域全体に声かけ等は行っておらず、子どもたちのやりたいことを支援していくスタンスをとっている。

えいや家ポケットでは地域の清掃にも積極的に参加している。

(委員長)

地域から批判的な声などもあるのか。

(眞鍋氏)

えいや家ポケットでは、活動を始めるとなれば地域から出ていく、といった意見もあったが、話を重ねることで住民からの理解も得られるようになってきている。えいや家には特にはないが、利用していない人から疎まれることもあり得るため、関係性には特に注意している。最終的には地域で運営してもらいたいと考えている。

(委員)

えいや家ポケットのスタッフについて知りたい。

(眞鍋氏)

理事が1名と地域のボランティア。

(委員長)

地域の人にも利用してもらっているのか。

(眞鍋氏)

町内会などを建物を利用して開いてもらうなどしている。最終的にはいつでも誰でも来れる場所にしたいが、まだそこまでは進んでいない。

(委員)

運営スタッフはどういった人に来てもらっているのか。

(眞鍋氏)

はじめの頃は勉強会などに参加していた人だった。地域のボランティアや大学生なども手伝いに来てくれるが、厳しい環境の子どもたちと接する中で、次第に子どもたちに会うのがつらくなって来れなくなるなど、人手不足は課題である。

ただし、人手が少ないときには子どもたちが手伝ってくれるなどのうれしい面もある。

(委員)

自分も子ども食堂を運営しているが、地域に声かけして来てくれるようになったボランティアからは、頑張っていることに対して目の目を見ない、などの文句がでてくる。そうしたことから続けることは難しいと感じることがある。

(委員)

大学生のスタッフには賃金は発生していたのか。

(眞鍋氏)

無償ボランティアでいいという大学生を除き、子ども食堂基金の予算やG I F Tからの持ち出しでアルバイト料として支払っている。

(委員長)

核となるスタッフは眞鍋氏以外にもいるのか。

(眞鍋氏)

G I F Tのスタッフが複数人いる。

(委員長)

スタッフの研修や勉強会などの範囲はボランティアまで含んでいるのか。

(眞鍋氏)

ボランティアまで含んでいる。

(委員)

ご飯は自分たちで作っているのか。

(眞鍋氏)

自分たちで作って、自分たちで食べている。

(委員)

自分たちで作るとするのは、将来のためにもいいことだと思う。

(委員長)

好きなことを目一杯できる環境なので、ものすごいスキルを身につける可能性があると思う。

今ある現状をフォローしてあげるだけではなく、本人が求めている以上の世界に出会えるような仕組みを考えることも大切。

(委員)

計算が苦手な子でも、料理はすごく得意な子どももいたりする。いろいろなことをする中でそこ（料理をすること）が居場所になっていく。

(委員長)

そうしたところから料理の世界に繋がっていくというような橋渡しがあるのではないだろうか。
企業との付き合いなどはあるか。

(眞鍋氏)

受入体制が整っていないため現時点ではないが、今後検討していきたいと考えている。

(委員長)

そういうところに行政の支援などもあった方がいいのではないかと。

(眞鍋氏)

人材や資金面に改善の余地があるので、組織としてしっかりさせていくために何かあるといいと思う。

(委員長)

学校からの反応などはいかがか。

(眞鍋氏)

教員の利用者や教員が子どもを連れてくるということもある。コミュニケーションの取り方には特に気をつけており、子ども同士の喧嘩もエスカレートしない限り介入しないようにしているが、学校で少し話題にあがったことがあったので申し訳ないと感じたことがある。

(委員長)

子どもに寄り添いつつも子ども扱いしないというのは非常に面白いと思うし、大事な部分である。

(委員)

体験からコミュニケーションや言葉を学んだりすることもある。

(委員長)

子どもたちは言葉を知っていても、体験することでその意味を理解する。

(委員)

呼びかけなどはそのような手段をとっているのか。

(眞鍋氏)

「貧困」というキーワードも出しておらず、宣伝はほとんどしていない。口コミで広げている。子どもの中で「ここには大ちゃん(眞鍋氏)がいて、勉強もできてご飯も食べられる場所がある」という認識が広がっている。テレビに映った後は、保護者も活動を知って安心されたのか、利用者が増えた。

(委員)

貧困か否かでの区別などはしていないのか。

(眞鍋氏)

区別はしていない。

(委員)

鴨田地区は比較的人口も多いが、活動をはじめると人口も展開のしやすさに比例するのか。

(眞鍋氏)

そうとは限らないと思うが、学校内での関係性を居場所に引き連れてくるので、学校に居場所がない子が利用しているところに学校の子が来るようになるとまた居場所にいられなくなるということがある。

(委員)

子ども食堂と居場所づくりだとどちらが始めやすいのか。

(眞鍋氏)

個人の考えとしては、子ども食堂の方が始めやすいと思う。

(委員長)

居場所は来る者を拒めない。居場所は千差万別なので、すべてに対応するのは非常に難しいということ。だからこそスタッフの専門性など、常に勉強できることが重要。誰かのために特化するということであればまた違ったやり方もあるが、そこが難しさでもある。

(委員)

眞鍋氏のスライドの中に七夕の短冊が写っていたが、そこに、「家族がしあわせでありますように」と書かれているのを見て、えいや家は居場所だが、子どもたちのベースはやはり家庭にあると実感した。

えいや家の取組は子どもを通じて大人の学びまで手がけているということを知った。PTAとしても協力し合うことのできることもあるのではないだろうか。できることを考えていきたい。

(委員長)

えいや家を利用している親同士で何かやってみようという動きなどはあるか。

(眞鍋氏)

今のところはない。今後はそういったこともあればいいと思う。

(委員長)

実現できたら親同士がなにかを始めるきっかけになっていいと思う。

(眞鍋氏)

本当にえいや家を利用して欲しい人には来てもらえていない。情報もないので行政と連携して行けたらと考えている。

【眞鍋氏は子ども食堂の準備のため退席】

(委員長)

これより、少し具体的に方向性を出すための協議をおこなう。

活動を始めようとする人への支援、活動している人への支援といった部分が必要なのではないだろうか。

子ども食堂など居場所となる場所が増えてきているので、市町村で学習会を開催し、県から援助するなど、スタッフの質を高めるために何かできないだろうか。

(委員)

子ども食堂のスタッフを対象とした研修会はあるか。

(事務局)

子ども食堂スタッフ研修会が各地区で実施されている。

(委員長)

いまあるものと違いを出すか、もしくは一緒になにかをするという選択肢もある。

(委員)

自分の周りの保護者には、自分の子どものことだけでなくみんなのことを考えられるような人が増えてきている。子ども食堂の運営に興味のある方もいる。PTAは「子どもの親の集まり」なので、そこに広く発信していくことが拡大に繋がるのでは。スタッフに対して気持ち程度の謝金が発生する仕組みがあれば、協力者も気兼ねなく参加することができるようになり、スタッフも増えるのではないだろうか。

(委員長)

裾野を広げることは大切だと思う。

(委員)

子どもたちにとっての「大ちゃん」(居場所になる人)を増やしていかなければならない。

(委員長)

(子ども食堂や居場所づくりを)始めたいと思っている人に、出会いやきっかけを援助できれば自然に広がっていくのでは。

(委員)

子どもが歩いて行ける距離にそうした場所がなければならない。

(委員)

広い視点で子どものことを考えられる人を増やしていくためにどうするか。家庭や学校に居場所がない子どもたちのためには居場所をつくるだけでよいのだろうか。居場所の中で、自分から住みやすい方向に考え方や行動を変えていくことのできる子どもを育てていくことも重要。

(委員長)

対処療法にならないためにもそこはとても大切なことに思う。居場所を運営している人が、子どもたちに対して、「自分たちで居場所をつくっていくんだ」と伝えていくことの重要性を考えていることは大切。

(委員)

居場所での成功体験を練習として、家庭や学校での体験につながっているように思う。

(委員長)

人にとって、社会（本番）に出て行くための練習の場となる中間組織が重要だが、そこが細くなってしまう。

(委員)

最近の子どもは失敗体験が少なく打たれ弱い大人になることが増えてきているという話もよく耳にする。そうならないために社会に出てから生き抜く力を子どものうちに身に付けなければならない。

(委員長)

厳しい環境にある子どもたちを支えようとしている団体も増えてきている。そうした団体を支援していくためのポイントのようなものはあるのだろうか。

(委員)

厳しいという言葉の範囲には金銭面やネグレクト、発達特性などが含まれており、一度の成功体験だけでは身につかない子どももいる。身体と言語とがリンクして「動作」になっていくことを学ぶことが成功体験の役割。

保護者にとっての居場所は、悩み相談などができる場となっているかもしれないが、ぶらうらんどのように子育てに関する技術をサポートできる場も必要。

(委員長)

重要なのは体験を「経験」に変えることであり、スタッフや教員の力量が関わってくる。

(委員)

子どもたちが居場所に来て身に付けた経験を学校や家庭にフィードバックする仕組みが必要なのではないか。

(委員長)

保護者やスタッフ等にも、子どもたちが居場所で様々な経験を積んでいることを理解しておいてほしい。

(委員)

今の子どもたちは注意されることは多いが、褒められることが少ない。子どもの「良いところ」をたくさん見つけられる支援者がたくさん必要。叱られてばかりだと、子どもの自尊感情は低下してしまう一方である。

(委員長)

眞鍋氏曰く、「小さな社会」をたくさん生み出していくことが大切。
次回は政策や予算化を視野に入れて協議していく。

【生涯学習課長挨拶】（中締め）

【施設内見学】 16:00～17:00

3 閉会